辞書と辞典のこと

小倉金之助

何か讀書についての話をというのですが。

それでは辞書と辞典といった種類の書物に對して、私の態度について、ちょっと申し上げましょう。

私は子供の時分から、辞書というものを、なるべく引かない方針でやって来ました。はじめて国語の辞書を手にするようなったのは、四十歳を越えてからで、物を書くのに、綜合雑誌に書くのですから、正しくする假名遣を誤ってはいけないと思ったのです。漢字の辞書は、英和・獨和・佛和などの辞書と同様に、稀に引くばかりです。それといいますのも、私は漢文も歐文も、譯しながら跳ねて読むので、棒読みのまま意味がわかるまで繰返し、どうやら意味がとれさえすれば先に進むので、ただ大切なところでどうしても意味のはっきり取れない場合に限り、最後の手段として辞書を引くだけなのですから。そんなわけで私は辞書

三省堂原稿用紙

たいして何の興味も持っていないし、古くから手慣れたものをただ一種ずつ手元におくだけです。いま手元にある英和辞典には明治三十七年（一九〇四）発行とありますが、この古るぼけた辞典を半世紀近くも使って私の後を来たわけです。

それでは百科辞典――それから哲学辞典――などというものは――はどうかといいますと、嫌いというのでしょうか、あまり使わないとかないのです。誰も本当にしないかも知れません。

が、私は石原純さんたちの有名な「理化学辞典」が、どんな本やら、一度も手に取って見たことがないのですから、その他推して知るべしでしょう。

百科辞典嫌いのかというのは、どんなものかを使わないのかというのは、良心的に出来ていても、つまりそれは短い項目の編集物だからです。問題の本質をはっきりとつかまえた上に、短い言葉で、解りよく説明するとなどは、どんな優れた人でも容易に出来るものではありません。

また そこんは一

貫した統一を見出し難いばかりでなく、どんな誤謬がある（ないとも限らないので、）かも知れない（信用）おけないし、買う気にならないのです。

ところが近来、小学校や中学校では、社会科などで、よくいろんなことを生徒にしらべ（ただ）百科辞典のひき写しのようなことをさせる結果になるのです。近頃は孫たちの質問に（應）ずるため、一やむを得ず私もかれらといっしょに、小さな百科辞典を引く機會がしばしばあるのですが、その体験によりますと、それは全く系統のない断片的知識の寄せ集めをやっているので、單なる物知りになるかも知れませんが、ほんとうに自主的に物を考える精神を養うのは、却って大きな邪魔をすると思います。この点につきましては、今の学校教育（してもいい）對抗議をどんなにして、強い抗議と考えます。一話が横道にそれてしまって、済みませんでした。

いわゆる編集物にある勝ちな、